

IV-73

国際観光需要動向とその経済的評価に関する研究

○ 名古屋工業大学 学生員 有友 圭一
 名古屋工業大学 正会員 松井 寛
 名古屋工業大学 正会員 藤田 素弘

1、はじめに 現在、世界中で4億2,500万人以上の観光客が自国以外で総額2,700億ドルもの額を消費する。これは世界の国際貿易の中でも最大の品目の1つと数えられる。一方日本国内からの海外旅行者数は、平成二年度に一千万人を超え、わが国からの海外旅行者が現地で消費する額は250億ドルにも及ぶ。これはわが国のODA額と比較してもその3倍近くに達している（図-1）。こうしたことから観光がマーケットとして巨大なものであるといえる。

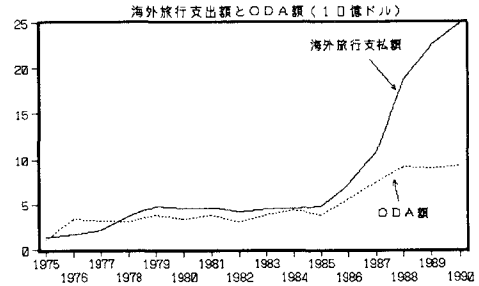


図-1

2、わが国からの国際観光旅行者数の将来需要予測 観光活動量を決定する指標としては以下の3つを挙げるができるだろう。(1)国民一人当たりの所得、(2)余暇時間、(3)情報量。(1)(2)(3)を表現するものとして入手の容易さから次のものを説明変数として用い、目的変数を国民千人当たりの国際観光観光旅行者数として重回帰分析を行った。(1) x_1 :国民一人当たりのGNP(U.S.\$ $\times 10^3$)(2) x_2 :年間平均労働日数(3) x_3 :供給情報量(ワード数)。ステップワイズ法を用いて変数選択を検討したが、 x_2 と x_3 はT値が非常に小さく除去した。

表-1 年齢・性別海外旅行者数予測モデル

	a_1	a_0	R	F値
0~19歳	0.0083	1.66	0.969	281.5
20代(男)	0.00462	8.42	0.968	286.2
20代(女)	0.00767	-6.37	0.965	619.7
30代(男)	0.00474	36.47	0.944	155.2
30代(女)	0.00229	-1.34	0.963	239.5
40代(男)	0.00624	25.78	0.947	163.7
40代(女)	0.00217	-0.99	0.952	102.9
50代(男)	0.00472	9.13	0.968	222.3
50代(女)	0.00246	1.22	0.981	484.3
60以上(男)	0.00262	8.22	0.975	367.9
60以上(女)	0.00131	0.63	0.984	567.6

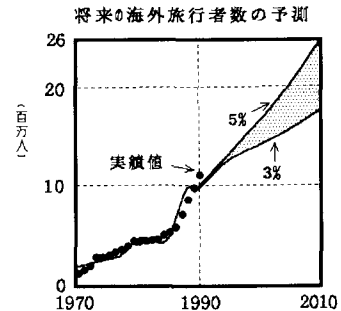


図-2

性別海外旅行者数予測モデルを構築した（表-1）。なお、目的変数： y は千人当たりの海外旅行者数である。したがって、全海外旅行者数： Y は厚生省の人口問題統計を用いて、 $Y = \sum_{i=1}^{n} \{(a_0 + a_1 x_i) \times \text{各人口}\}$ で表され、将来の海外旅行者数を予測した（図-2）。なお将来において、為替レートは1US\$=¥130、また経済成長率を3%~5%と仮定し算定した（●は実績値）。これより、2010年には海外旅行者数は2千万人前後に達することがわかる。

3、わが国からの渡航先

わが国からの渡航先の地域別分担は図-3のようにな
依然アジアが半数を占めているものの、徐々にシェアを減らし、その分オセアニアのシェアが増えつつある。しかしこうしたわずかな変化以外は、ほとんど地域別分担は一定である。一方、アジア内だけに限定しシェアの推移を考察すると、中国、台湾、韓国、シンガポール、タイ、フィリピン、インドネシアが依然としてその大部分(約90%)を占めているが(図-4)、各国間のシェアの変動はかなり大きい。

4、経済的評価

ここではモデル国としてタイを取り上げた。タイ1985年度産業連関表を用いて、観光の主な収入源であるホテル、レストラン業の他産業に及ぼす影響力、また他産業から受ける影響力の程度を分析する。まず、投入係数行列をA、生産高ベクトルをX、最終需要ベクトルをFとすると

$$AX + F = X \Leftrightarrow F = (I - A)X \Leftrightarrow X = (I - A)^{-1}F$$

と表すことができる。ここで、行列 $B = (I - A)^{-1}$ はLeontiefの逆行列と呼ばれるもの

である。さらにRasmussenの影響力係数 $DE_j = \frac{\sum_i b_{ij}}{1/n \sum_i \sum_j b_{ij}}$ と感応度係数

$$DK_i = \frac{\sum_j b_{ij}}{1/n \sum_i \sum_j b_{ij}}$$

を用いてタイにおける各産業の分類を行った。影響力係数は、j

部門生産物の需要が、経済全体に対してどの程度の生産誘発を引き起こすかの相対的指標。感応度係数は、所与の最終需要によって、i産業の受ける生産誘発レベルを示す。なお b_{ij} は行列Bのi,j成分である。各産業をDE、DK軸にプロットしたものを図-5に示す。これによるとホテル、レストラン業は、現時点(85年度)の産業構造では影響力係数が比較的小さく、これだけで経済全体を活性化させるには不十分であると考えられる。

5、今後の課題

わが国からの海外旅行者の具体的な買い物動向を分析し、わが国旅行者の消費が、タイ国経済に及ぼす波及効果を計測する。また観光産業の、雇用創出性、外貨獲得性についても分析を行い他角的に観光産業を評価する。

<参考文献> 横倉弘行「産業連関分析入門」窓社、津野義道「経済数学II」倍風館

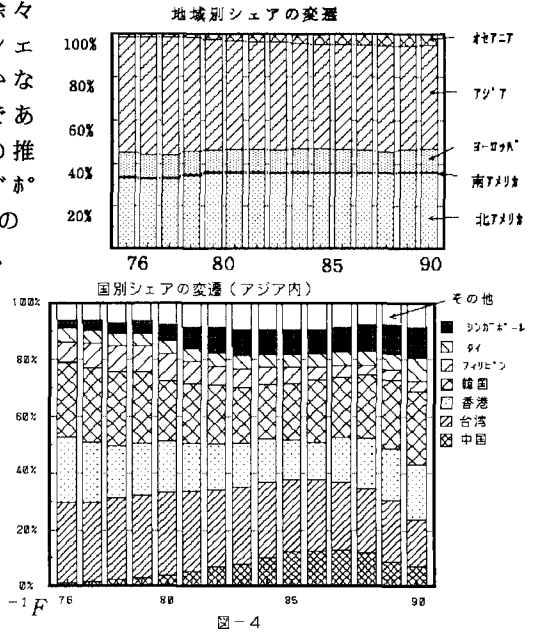


図-4

タイ国内産業の影響力係数: DE

感応度係数: DK ('85年度)

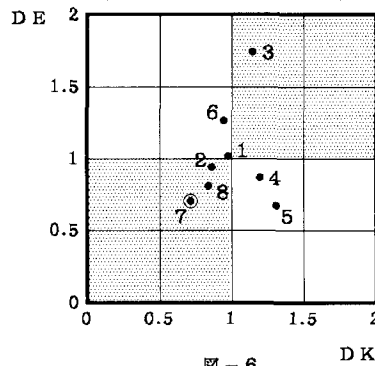


図-6

- 1: Agriculture, Livestock, Forestry, & Fishery
- 2: Mining, Quarrying
- 3: Manufacturing
- 4: Electricity, gas, Water supply
- 5: Construction
- 6: Trade
- Transportation
- 7: Hotel, Restaurant
- 8: Other services